

## こころを照らすひかり

―三つの華物語―

岡田 真美子

### 一 はじめに

誠におそれいりますが、ご起立いただけますか。皆さん、こんにちは。どうぞお座りください。

コスモスが大変美しい季節になりました。わたくしは花が大好きな人間です。本日はこちらの大学名「光華女子大学」に因んで華と光の話をしたと思います。

今日のお話の流れをお話しておきましょう：

①「私の生い立ち」

②「花よりダンゴと言うけれど」――「三つの華の物語」をさせていただきます。

③それから「こころを照らす」、暮らしを照らしてみる。ある尊敬する若い人の幸せ方程式というものについて最後にご紹介いたします。

## 二 私が生い立ち

わたくしは京都生まれです。今日は久しぶりに故郷に帰ってすることができ、大変うれしく思っています。これが、実家の南、烏丸五条の近所の写真(略)です。わたくしが生まれた昭和二十九年(一九五四年)のころ、五条通りは舗装されておらず土が見えています。

次は三歳の頃のわたくしでございます。私の実家は熱心な仏教徒で、ご飯の前に必ず「おあずけお経」があるのです。(おなかが減っているのに「おあずけ」なのでそう呼びました。)しかもお経の文句が甚だ不可解で、よくわからない。これは大変苦

こころを照らすひかり



痛でございました。宗教は、面倒くさいものであるな、と子どもごころに思っていました。

小学校のとき『聖書物語』を読みました。聖書は結構、訳が分かります。大変興味を持ちましてこっそり教会に通ったりいたしました。(バレましたけども。)そういうわけで、わたくしは仏教の専門家でありながら、牧師さんのお友だちとかがいて、いまだに聖書もよく読ませていただきます。

さて、ひよんなことで印度哲学科に行くことになり仏教の勉強が始まりました。そして同級生の岡田行弘と学生結婚して岡山のお寺に嫁ぐことになりました。わたくしが二四歳なりたて、岡田も同じ二四歳でございました。その後、二人でドイツのボン大学に留学しました。昔、ペーターベンが仕えていた宮廷が校舎です。そこで博士号をいただきました。

これが今の職場、環境人間学部です。人間環境学部ではなく、日本中でここだけが環境人間学部と申します。明けて四

月には神戸商大、看護大と統合して、兵庫県立大学になります。

住んでいる家はお寺でございます。これが岡田で、こちらが岡田の母です。岡山大学一期生でこちらの三村学長先生の先輩になります。この大変聡明で大変優しい姑と出会えたのが人生の最大の幸せのうちの一つであると思っています。となり結婚一〇年目にできた息子がここにあります。司馬遼太郎の『播磨灘物語』に登場するこの寺で三世代同居しております。

私の趣味は勉強です。今日はそういうわけで、私が勉強したお話を皆さんに少し聴いていただこうと思っています。

### 三 三つの華の物語

#### 三一 水仙三題

#### 皇后様の水仙

最初は震災の話です。前任校である神戸の女子大にいた時、阪神大震災がございま

こころを照らすひかり



した。女子大学は二人の大切な学生を亡くしました。女子大学に行く道もほとんど家が倒れておりました。これは長田の写真（略）です。こういう状態の中、皇后様が水仙を持って、この町をお訪ねになりました。その水仙は随分と人々の心を慰め、励ましたということをお聞きしました。（京都光華女子大学をおつくりになった先のお裏様は皇太后様の妹様でいらつしやいましたので、皇后様は義理の姪になられるのです

ね。）この水仙を記念して、二〇〇一年に水仙の花壇が長田に作られました。（写真撮影・大木本美通 神戸大学附属図書館 WWW版制作）

### 水仙とお医者様

もう一つこのころに残る水仙があります。震災後たくさんの人がこのころのケアが大切だと言いました。精神科医の人たちが入れ替わり立ち替わり神戸にやってくる。「よく眠れましたか?」「何か心配なこと

はありませんか？」と聞き、被災した子どもたちに、地震を思い出して絵を描くことをさせました。こんな中、精神科医であることを明かさず、ずっと怪我の治療だけをして、一週間ほどして、水も出るようになって、電気もついて少し落ちついた頃故郷に帰っていった方がいらっしゃいました。別れ際に故郷の福井から水仙を五〇〇〇本取り寄せて、患者さんたちに配ったそうです。大平健という精神科医が、自分が同じ状態になったら同じようにするだろうと書いていました。(朝日新聞九五・三・一九)

松原六郎先生とおっしゃるお医者様のおはなしでした。

### 水仙の連句

「リュックずらり、満員電車の網棚に」 連歌のように次につけます。

「災難越えて生きる喜び」 それにまたつけてー

「水仙の香りほのかに瀬戸渡る」。

水仙の話は震災の頃、ずいぶん詠まれています。お花の香りはアロマセラピーの効果とがありますね。ところが落ちつくんですね。水仙は一月頃から咲く花なので、水

仙を見ると震災を思い出します。

### 三十二 黄色いチューリップ

今尼崎では、町の中に一杯チューリップを植えている運動をしています。

丁度水仙を配ったお医者さんが帰った頃、今度は、チューリップを背負子に一杯担いできたお医者さんがいました。作家で精神科医の加賀乙彦さんです。「暖房のない病棟で、患者や看護婦のこころをあたためるのに花は大きな力を発揮した」と「天声人語」(一九九五・三・七)に書かれています。(出典：中井久夫「一九九五年一月・神戸「阪神大震災」下の精神科医たち」)

お若い皆さんを見てみると、皆さんの存在がそもそも家庭や社会で、いろいろなところで花のようにいろんな人のこころを慰めるんだらうなと思います。今日、この学食で外の椅子に座って、プレゼンを直していました。直しながら、皆さんが楽しそうにお話されているのを見て、さぞかし、皆さんの周りの方々は皆さんによって慰められるんだらうなと思いました。

### 三一三 「花の種を下さい」

これはカンボジアで内戦があった時に虐殺された人たちの慰霊塔です。(写真略)ポルポト政権は、はじめ貧しい人と貧しくない人の差を縮めようとしたのですが、次第にエスカレートして、教育のある人、学校の先生たち、はては眼鏡をかけているだけでつかまるようなことになってしまいました。一九七五年～七九年までの間に、一七〇万人前後(人口約七〇〇万人)の命を奪ったといわれています。

一九八一年、カンボジアが解放されてから少したった頃、戦火に荒れた町に、日本から支援しに行ったお坊様たちがいました。そのお坊さんたちが、学校に行って支援を申し出たところ、校長先生はこうおっしゃったといいます。「花の種をください」。

「日本にはどんな花が咲くのですか。種を育てて花を見せてやれば子どもたちは喜ぶことでしょう。子どもたちの笑顔を取り戻すことが祖国復興の第一歩です」。

支援に行ったお坊さんたちは大変驚いて、その後、アジアに支援に行く時の気持ちがあすっかり変わったとおっしゃっていました。(伊藤佳道(二〇〇二)『慈しみの国ラオ



こころを照らすひかり

ス」BAC仏教救援センター)

#### 4. 世を照らす布施

##### 四―一 和顔 施

「布施」という言葉があります。皆さんも仏教の時間にお聞きになった方があるでしょう。サンスクリット語で「与える」という意味の動詞は√da (ダー)と言います。名詞になると dana (ダーナ) となります。ダーナを漢字で書くと「旦那檀那」になります。旦那というのは「ものを与える」というところからきた言葉です。

布施というのは私たちができる、善い行いの中で一番易しいものとされます。どんな人でも布施をすることができます。何も持っていない人もできる布施の一つが和顔施、笑顔の布施です。お花は笑顔と同じようなものだと思います。

「真の仏性とは他者に微笑みを移す力のことかもしれない」―映画『地球交響曲』

の監督、龍村仁さんの言葉です。これはある具体的な人をイメージして語られた言葉です。わたくしは一月五日、奈良でその方にお会いできるので、今からとても楽しみにしています。それはダライ・ラマ、チベットの法王です。

ダライ・ラマ法王の微笑みというのが、特別なものだということですね。皆さん、チベットという国は今、どうなっているかご存じでしょうか。チベットは中国の一部になっていきますね。第二次世界大戦の終わりにたくさんチベット人が殺されて、その後も弾圧を受けて中国の一部にされてしまいました。ダライ・ラマ殿下は一五歳でした。変装して雪のチベットの山を越えてインドに逃げられたわけです。そういう大変な苦難の中で法王というものを続けていらっしやるわけです。ダライ・ラマの講演会があるというので、龍村さんという監督さんが行かれたんですね。一列目にずらっと偉いお坊さんが並んでいらっしやいました。「権威ある地位にある人たちは皆、ある程度しかめ面をしている。ところがそこに法王が満面にこほれんばかりの笑みをたたえて合掌しながら入場してこられた」。だんだん法王が話しだすにつれてお坊さんたちの表情が変わっていったのを龍村さんは見ていました。最初はしかめ面だったお坊さん

こころを照らすひかり



たちの表情がみるみるうちに緩んでゆき、講話が終わる頃には、お坊さんたち全員  
の表情が、威厳とはほど遠く、まるでいたずら小僧が褒められたときのような、嬉そう  
な微笑みに変わっていったというのです。こういうふうには人の顔が変わった時に、龍村  
さんはさっきのことを思ったらしい。仏性をもった人は、他の人に微笑みを伝染させ  
ることができるのだと。ダライ・ラマ法王の微笑みのもとはどこにあるのでしょうか。

法王は「人間の究極の本性は慈悲と利他のところであ  
る」と主張しておいでです。このような考えがああ  
の微笑を生むのでしょうか。

本性に慈悲と利他のところがあるという、のんきだ  
なあ、と言う人がいるかもしれません。確かに人はいろ  
んなことを行いますけども、本性は他の人のことを思い  
やる気持ちがあるはずだとわたくしも思います。自分の  
体の中を考えてくださいませ。わたくしたちの体の中に  
たくさん細胞があります。その細胞が皆、本当に我儘

だったらどうでしょう。細胞自身も、それが構成する個体も共に滅びてしまいます。自分一人生きていくというのはこの世でありえないし、必ず自分の隣の誰かと調節しながら生きていかなければならないはずなのです。ですからわたくしたちの体の中には周りの人たちと調節して、譲り合って、他の人のことを考えながら生きていく仕掛けが必ずしてあるはず。その仕掛けをダライ・ラマ法王は「慈悲と利他のこころだ」と言っておられるのだと思います。

この宮殿はダライ・ラマが一五歳まで住んでいたチベットの宮殿です(写真略)。この前にいるのは、その前で祈っている人です。ダライ・ラマが生きている間に、ここへお帰りになる日が来るのかどうかはわかりません。「破壊的な感情は苦しみをもたらす」と真剣に主張する法王を、いつか中国の人たちも理解して、チベットに返してあげてほしいなとわたくしは願っております。

さて、破壊的な感情を「貪瞋痴」(トンジンチ)といいます。特に「痴」は暗闇であって、それに智慧の光を当ててやればよい。光を当てて華になろうというのが「観

こころを照らすひかり

無量寿経』にあります。京都光華女子大学のもともとの建学の精神だと聞いたことか  
ございます。「その光、華のごとし、また星月の虚空に懸処せるに似たり」。この大学  
の興りになった『観無量寿経』の一節ですね。

#### 四―二 光の布施

「怨みに報いるに怨みをもってしたならばついに怨みのやむことがない。怨みを捨  
ててこそ怨みはやむ」（『ダンマパダ5』）

『ダンマパダ』は大好きな仏典です。現代語訳が岩波文庫の中にあります（『真理  
のことば感興のことば』）。

戦争で仕返しにいつてよその人を殺す。殺した相手は自分の大事な人を殺した相手  
でないことが多いですね。まず自分の大事な人を殺した人に復讐なんか、戦争ででき  
ることはないでしょう。違う人を殺すでしょう。その人はまた復讐に來ます。今度も  
自分の大切な人ではない人を殺す。そんなことをしていたらいつになったら復讐は遂  
げられるんでしょうね。

さきほどのダンマパダの言葉が一九五一年、日本のために語られたことがあることを皆さんはご存じでしょうか。私も知らなかったです。生まれる三年前のことですから。一九五一年、第二次世界大戦の講和会議があった年です。戦争の後始末を話し合う会議です。そこで日本に賠償を要求する国々の人々が集まりました。セイロンの大蔵大臣ジャヤワルディネ（後の大統領）が演説をしました。そのとき彼はこの『ダンマパダ』の一節を引用して、憎しみを持つことなく、日本に対する賠償権を放棄することを表明したのでした。スリランカだけではなく台湾も韓国も同じように賠償権を放棄してくれ、そのおかげで日本は早く立ち直ることができました。残念なことに、わたくしたちはこういうことを学校で習っていません。本当は、こういうことを習ってスリランカの人々には感謝したほうがいいですね。ご恩になったことをしっかりと覚えておきたいと思うわけです。



ジャヤワルディネさんはこういう演説をしただけでなく、「視力を失った日本の人に、私の角膜を役立てるように」という遺言を残しました。死後実際に角膜のひとつは群馬県在

こころを照らすひかり

住の日本女性に移植されました。その方は再び光を取り戻されました。光の布施とい  
ったのは角膜のことです。光を失った人たちが角膜をもらうことで光を取り戻す。す  
ばらしい布施ではありませんか。

これだけでなく、わが国はこれまでスリランカから少なくとも二千以上の角膜の寄  
贈を受けています。スリランカにはシビ・ジャータカという仏の前世物語に倣って眼  
施をする人が多くいます。昨年十月には国交五十年を記念して新たに五十の角膜を贈  
られました。大変ありがたいことです。

日本の医療関係者の方々はお返しに医療援助をして下さっているけれど、大半の国  
民はこのことを知らないままです。このことをぜひ皆さん知っていただきたいと思  
います。

## 五 いい加減な宗教

少し自分たちの宗教を振り返ってみたいと思います。

わたくしは、五条の北、烏丸と河原町の間の有隣小学校から尚徳中学に進みました。この中学の区域にお東さんがありましたので、その向かいの仏壇屋の同級生がおりました。懐かしいです。下は枳穀邸の風景です。

「わたくしの大学の学生に「あなたの宗教は何ですか？」と聞くと「私は無神論です」という人が結構います。無神論は、「特定の宗派に属しない」ということではなく、「神はいない」と信じることです。これも一つの宗教かもしれません。

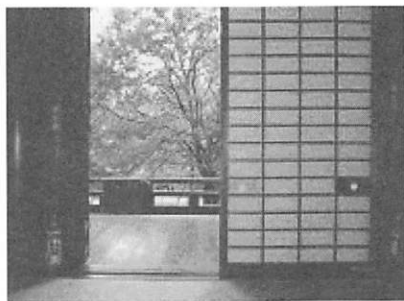
また「日本の宗教はいい加減だ」とよく言われます。いい加減で恥ずかしいという人もいます。わたくしは後で述べるようには、いい加減はちつとも悪いと思っていないせん。

日本の宗教に似たものにヒンドゥ教があります。ヒンドゥとは「インダス河の彼方に住む人々」ということでヨーロッパ人の古い呼び習わしです。

ヒンドゥ教が日本の宗教とよく似ているのは、まず開祖がない、預言者がいない、唯一絶対の経典がないという点です。仏陀もヒンドゥの神の権化の一人になっています。ヒンドゥ教はきわめて寛大な宗教で、排他・選別・差別をこととせず常に異質



こころを照らすひかり



なものを吸収同化して現在に至っています。ヒンドゥー教は永いインドの歴史の中で培われた生活様式、社会習慣の全体に相当しています。日本の宗教もまたそうです。生活習慣、社会習慣、生活の仕方全体を指している。仏教はいい加減だといいますが、それは仏教のあり方で、ゆるやかな宗教なんですよ。わたくしは「いい加減」(＝「良い加減」というのを見直しましょうということを申し上げます)。

さて、仏教よりはきっちりしていると思われるキリスト教も面白いことをしています。イエス様は二月二十五日には生まれていません。なぜか。イエス様が生まれた時、羊飼いたちが野宿していたと聖書に書かれています。砂漠は夜冷え込みます。気温が零

下で野宿すると凍え死にます。砂漠で野宿というのはある一定の暖かい季節にしかできない。では、なんで一二月二五日がイエス様のお生まれになった日になったんでしょう？ 実は一二月二五日はイエス様の前からローマ人たちの太陽のお祭りの日でした。つまりこの日は冬至のお祭りの日だったんです。一年で一番暗い時にパッと楽しくお祭りをして太陽をお迎えしましょうという日です。ですからクリスマスはキリスト教固有のまつりではなく、日本人がお祝いしても構わない。うちのお寺で子どもが小さい時、クリスマスツリーを飾りました。何か楽しいじゃありませんか。ケーキも食べますよ。

それからクリスマスツリーもキリスト教にちなんだものではありません。もみの木が砂漠にあるのですか？ もみの木はゲルマンの木です。(クリスマスツリーはキリスト教がゲルマンのお祭りを採り入れたのです。今でもドイツ人は五月一日に木を立てるお祭りをしているんですよ。ゲルマンの人たちは木を立てるのが大好きです。クリスマスツリーは森からとってきた本物のもみの木で作りまして、その後、庭に植えるんですね。子どもが大きくなっていくと、もみの木が増えていく。勿体なくななくて

こころを照らすひかり

いですね。)

さて、大切なクリスマスもローマやゲルマンの風習を取り入れたお祭りであるということをみますと、クリスチャンの方に比べて日本人はいい加減だなんてことは簡単にいえなくなりますね。どこの国の方も自分たちの生活習慣、文化を上手に採り入れて血の通った宗教をつくりあげているわけです。

逆に「日本人はとても宗教的だ」と言われたことがあります。日本にはホームチャペル、家庭礼拝堂がある。海外でホームチャペルというとお城に住む貴族しかありません。地下に納骨堂があるような人々です。日本では多くの家に、ホームチャペルがある。つまり、お仏壇や神棚です。ホームチャペルのネット販売がございます。こんな国はありません。こうしてみると結構、日本は宗教的ですよ。

うちの学生でも「宗教を信じない」という人でも「朝、テレビを何みた?」「占いを見た」。占いは立派な宗教ですからね。信じるとか、信じないとかの世界ですから。自分たちの宗教的な習慣を恥ずかしく思うことはないと思います。日本には日本の習慣があるのです。



## 六 知足と幸せ

### 六―一 知 足

「いい加減なやつちゃ」という時のいい加減ではなく「好い、加減」が大切です。

これはお寺にあるものです。石の真ん中の四角なくほみに水が貯められている。上に「五」、右に「佳」、下に「」、左に「矢」が彫つてある。吾、唯 足るを知る。上竜安寺にある蹲（つくばい）です。過剰品質を追求しない。私はこれで十分だという適量を知っていますよ、ということ。 「いい、加減を知る」ということは「自分はこので十分なんだよ」という、貪りのこころを離れる気持ちの一つです

### 六―二 ぐらしを照らしてみる

こころを照らすひかり

くらしは便利になりました。栓をひねればお湯の出る暮らし。皆さんにはあたりまえでしょう。わたくしにとつては全然あたりまえではありません。冬の水道の水は手の切れそうに冷たかったです。

快適になりました。スイッチを押したらお部屋が涼しくなったり暖かくなったり。子どものころ、五条通りがまだ土だった時には信じられない話です。

便利で快適な暮らし、冷たい飲み物がいつも台所にある。一日中、あたたかいご飯が食べられる。これも夢のよ止な話です。私はそうではないけど、うちの母の世代なら、白いご飯がおなか一杯食べられることが夢であった経験を持っています。どの部屋にも灯がついていることも当たり前ではありませんでした。昔は、洗面所とトイレと同じ電気で、長いコードのついた裸電球をトイレに持って入る。手を洗う時は洗面所を持ってきてかける。どこのご家庭でもそんなことをしたものです。

こんな便利な暮らしで余裕ができましたか？　なんでもますます忙しくなってるの!？　これで昔よりずっと速く仕事ができるという機械が家中目の前に一杯あるのに、昔より今の方が忙しいのです。またすごく快適になりましたが、どうですか、幸せになっ

たんでしょかね。幸せ探しは流行っているんですけど、幸せ不感症の人が一杯、と言うわけです。なんでなのでしょう。

わたくしの住んでいるところはいなかで、どこへ行くのも自動車です。ちょっとそこまで郵便を出しに行くのにも車に乗っていきます。車に乗って近所の郵便局に行つて、健康のために夜歩く。これは危ないですね。自動車に乗ってエステにいつて、動かない自転車を漕いでいる人もあります。なんでこんなことをしているのかなと思うことがあります。

忙しいという字は「立心扁(りっしんべん)」に「亡」、つまり「心を亡くす」と書きます。忙しいというのは危ないことです。「四秒が待てない私」と渡辺和子先生(ノートルダム修道院)がおっしゃいました。「閉」ボタンを押さなくても四秒たつたら自動的にエレベータのドアは閉まります。なのにボタンを押してしまう。そこで節約した四秒をどこでどういうふうの有効に使っているのでしょうか。わたくしはこれを聞いてから、エレベータに四階までは乗らないし、閉じるボタンを押すこともやめました。便利が時間を短縮しても、どこからも余裕は出てきません。わたくしたち

こころを照らすひかり

は何を慌てているんでしょうか。

「スロイズム」ということが最近よく言われます。ぐずぐずすることではありません。ゆったり、じっくり行きましようというわけです。ファーストフードも結構好きです。でも時々じっくり味わってみましよう。

六一三 当たり前点検

私たちは足元に幸せがころがっているのに、どうもそれを蹴って歩いているらしい。さっきの夢のような暮らしを考えると、よくお分かりでしょう。足元に転がっている幸せに光を当ててみませんか。足元の幸せは一人ずつ違います。割合他愛もないことだったりします。窓の外の葉っぱがそよいでいたり、吉井川の川面が輝いていたり、こういうのを見ていると、とても幸せになります。息子が「おいしいよ、お母さん」と食べてくれた時、うれしいですね。なぜかお風呂上がりにはコーヒー牛乳を飲むことも幸せです。子供の頃、栄養は白い牛乳のほうがあるからと、コーヒー牛乳は減多に飲ませてもらえませんでした。夏の盛りにお墓参りに行ったときなどに特別「真美ち

やん、かしこかったな」とコーヒー牛乳を買ってもらえたりしました。ですから風呂上がりにこれを飲むと「ああ、幸せだ」と思うわけです。みなさんも夜に「幸せ日記」を書いてみませんか。「今日はこれが幸せでした」ということを。

さて、他愛もないありふれた幸せほど、失われた時、ものすごい打撃です。皆さん「めんどくさいな、話早く終わればいいのに、こんな宗教講座」と思ってますね。「講義があつてめんどくさいわね」。講義にできることを当たり前みたいにしていきますけど、ひよつと皆さんに何か問題が起こって大学に来られなくなったら、(そんなことにならないようにお祈りしていますが)「あの頃、私は大学に行けてたんだ。あの講堂に座つてしようもない話も聴けたんだ」とお思いになるかもしれません。ありふれているようですけど、大学に行けている人がこの世界六〇億の中に何人いるでしょう。ここで皆、楽しく、お友だちと過ごせる時間を送っている人が世界にどれくらいいるでしょう。

ご飯が食べられるのはあたりまえですけど、食べられなくなると大変でございますよね。もつとすごいのが、息をすること。息ができなくなったらどうなんでしょう。



こころを照らすひかり

義理の叔母が肺を患って普通の人の三分の一しか息ができない様子を見た時、まねをしてみました。苦しかったです。それで悪いけど、胸一杯息を吸って「ああ、いい気持ちだ」と思いました。ですからあたりまえな幸せほど、失われたら大変なんです。時々「あたりまえ点検」をすることはとても大事なことです。

最後に「幸せの方程式」をご紹介します。

みなさんの大学の入り口に中坊さんと市田ひろみさんの対談の写真が掲げられていました。中坊さんの幸せは東京で仕事をして帰る時、横浜のシウマイを食べることだそうです。シウマイを一個ずつ食べてビールを飲む時、彼はとても幸せなのだそうです。自分は小さなことで幸せになれるという特技をもっているとおっしゃいました。

幸せの方程式はこういいます：

「幸せになれるかどうかは、どれだけあたりまえのことに感謝できるかにかかっている。」

これを言ったのは岡田文弘、つまりわたくしの息子です。息子が風呂上りに、にこ



にことコーヒー牛乳をのんでいるわたくしを見て、「お母様はほんとに幸せな人だね」と言って、このことばを言いました。最初は息子にからかわれたと思いましたが、でも彼は本気でした。「お母様は普通の人があたりまえだと思っていることをうれしいと思えるから、そんなに一日中、にこにこしてらんだね」。私が彼から聞いた生涯で最もうれしい言葉の一つでした。

最後にこれはお釈迦様がお亡くなりになった場所の現在の風景です。お釈迦様は人生最後にこういう言葉を残してお亡くなりになりました。「諸々の事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成しなさい」。諸々の事象は過ぎ去るものである。この世のあらゆるものはすべて何か変化していつてしまいます。必ずなくなっていくきます。変わっていきます。周りが変わるから私たちはいつまでも同じ状態にいることはできません。だから一生修行をしましょう、とこれがお

こころを照らすひかり

釈迦様の遺言でした。このお釈迦様の言葉を最後に皆さんに贈りたいと思います。

いろいろなことが変わっていきます。その中で毎日小さな幸せを探しています。

「ああ、私は今日、これで幸せだった。京都に来てこんなにあくさんの若い方々に話を聞いてもらえた」。今日の私の幸せ日記には多分、このことが記されるでしょう。

## ま と め

おなかは膨れなくてもこころを明るくする花がある。皆さんはきっと、そんな花におなりになるでしょう。暮らしの中の仏の教え。私は難しい仏教の教えより、暮らしの中にある教えの方を大事にしていきたいと思っています。幸せになるためには足元をてらして、「当たり前確認」をやってみよう。このようにして光によって華になる。皆さんの将来が、どうぞ、光に包まれた明るいものでありますよう、ここからお祈り申し上げます、今日の私のお話を終わりにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

—二〇〇三年一月二十八日—